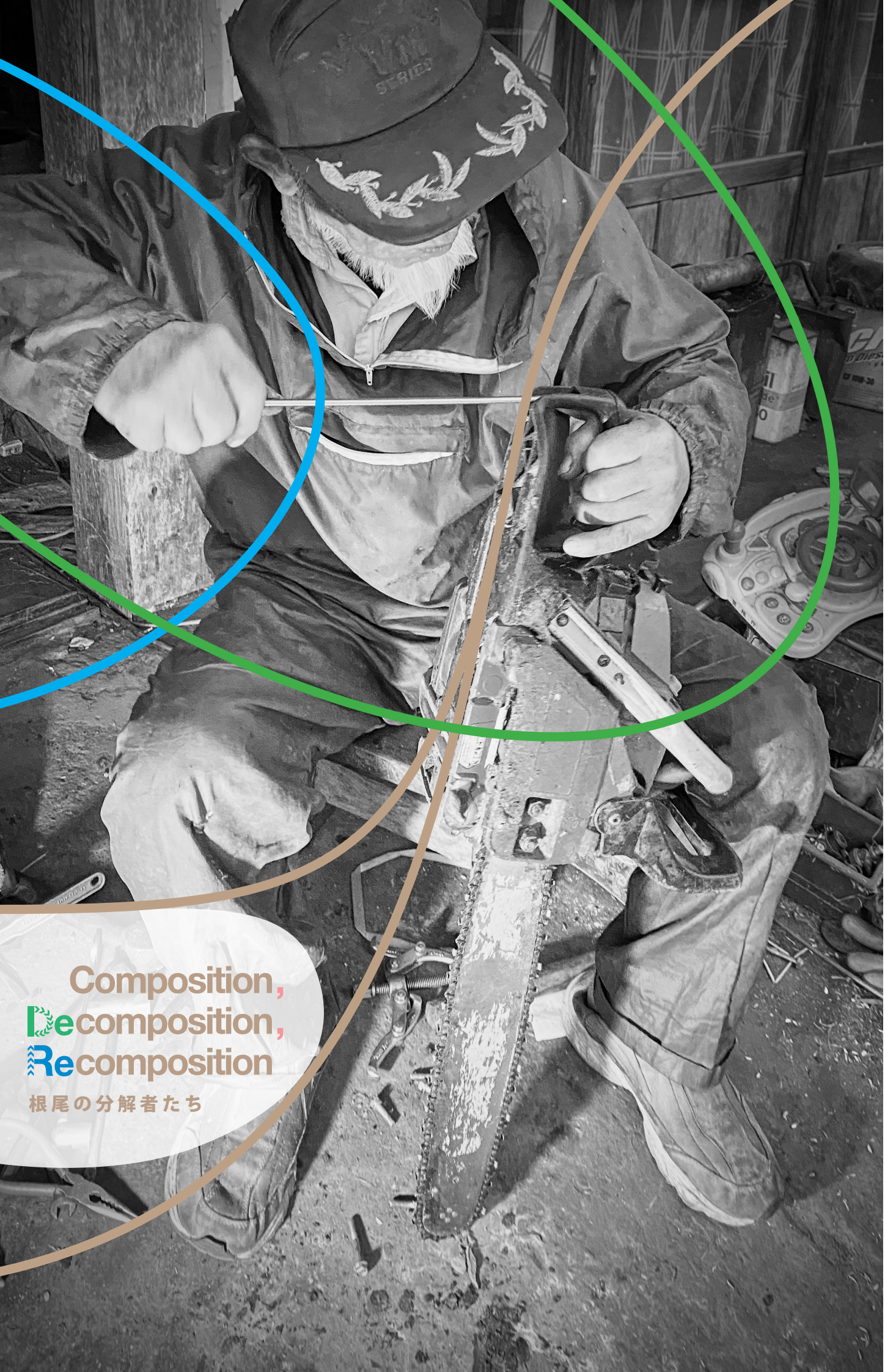


Composition, Decomposition, Recomposition

根尾の分解者たち

COMMUNITY RESILIENCE RESEARCH 2020

COMUNITY RESILIENCE RESEARCH 2020

Composition, Decomposition, Recomposition
根尾の分解者たち

中山間部の多くのコミュニティでは、少子高齢化や人口減少による限界集落化、空家の増加、地域経済や地域文化の衰退などの問題に直面しており、これを解決するために移住、交流人口の増加、新たな仕組みや補助金などよる地域活性などの対策がとられてきた。一方、人と自然からなるシステム、つまり社会生態系システムの視点でこれらの問題をみると、そこには何らか事情によって撹乱された社会生態系の姿が浮かびあがってくる。

杉に植え替えられた山の樹木は林業の衰退によってアンダーユースとなり、管理不足となった人工林は土砂崩れを引き起こす原因となっている。これを防ぐためコンクリート構造物で固めた山肌は、今度は環境に影響を与えることになる。山奥の渓流に作られた砂防ダムや流路工は、山と海をつなぐ渓流がもたらす生態系を分断化・単調化する原因となった。鮎やうなぎが棲息できなくなった川では、毎年養殖された稚魚が放流されるようになり、分断された川中で釣り人たちに釣られるまでそこで生きることになる。天然素材を活かした集落の暮らしも電化され、プラスチックやビニルなど石油化学製品が使われるようになった。自力で作った小水力発電は大規模なダムに置き換えられ、自前の水源も上水道に取って代わられていく。主を失った家屋は放置され、いつの間にか自然へと回帰されるべく朽ち果て、大量の消費製品の残骸が人新世の地層形成に貢献していく。おそらく、日本のほとんどの過疎地では似たような状況に見舞われているだろう。

社会生態系のシステムが変化を余儀なくされながらも、基本的に同じ機能・構造・フィードバックを維持していられる能力をレジリエンスと呼ぶが、見方を変えれば、望ましくない状態から元の状態に回帰させる能力と言い換えることもできるのではないだろうか。社会には、家庭、農場、森林、地域、産業など多様で複雑な社会生態系システムが存在し、誰もがこのシステムの一部となって生きている。人類は「短期的な最適化の達人」と表現されることがあるが、資源やシステムの最適化は、同時に社会生態系システムのレジリエンスを低下させている。地域の限界集落化や地域経済の衰退といった問題は、社会生態系システムのレジリエンスの問題であり、これまで維持されてきたシステムから脱却し、異なるレジーム＝別の安定状態への移行と捉えることもできるだろう。そこには、短期的な最適化とは異なる可能性、つまり、人と自然が長期に相互作用しながら、レジリエンスに富んだ社会生態系システムを再構築できる可能性を見出すことができる。

本プロジェクトでは、根尾をはじめとする岐阜の中山間部でのフィールドワークを通して、地域の問題を「社会生態系システムのレジリエンス」として捉え直し、また意識化してみせることで、これからの持続可能な地域社会への移行を望む私たちにとって何が大切なのかを検討した。今回、導き出したひとつの答えが「分解者」。分解者とは、「生産者」であり、「消費者」であり、「還元者」でもある。しかし、あるものを違うものへと作り変えるという意味において、分解者とは、「世界を作り直す」ものなのである。

参考文献
ウォーカー , B. & ソルト , D. 2020.『レジリエンス思考――変わりゆく環境と生きる』みすず書房
藤原辰史 2019.『分解の哲学 ―腐敗と発酵をめぐる思考』青土社

分解のかたち

金山 智子

中山間部の集落での観察を通して見えてきたのは、人と自然の共存による「分解」のあり方だった。

ビール缶や一升瓶、皿や湯呑み茶碗、風呂桶や流し台、タンスやちゃぶ台、洗濯機や扇風機、日記やアルバム、人形や賞状、本やレコード、ヘルメット、薬、紐、自転車や車、倉庫、そして家 .... 小さな集落には、用済みになったさまざまなモノたちがひっそりと棲み続け、多様な分解者たちにより異なるかたちで再生に向けた循環のサイクルが回り続けられている。

大量生産・大量消費・大量廃棄型の社会システムにおいてゴミの処分は極めて重要だ。そこでは生産者・消費者・分解者という三者間での有機的な連携が望まれるが、それこそが実は難しい。他方、自然界では、植物・動物・微生物の三者が完全なサイクルで繋がり、その循環を繰り返している。

中山間部でのフィールドワークを通して発見した多様な分解のかたち。そこには、よく見ないと分からない無機物と有機物の相互作用が存在する。長い時間幅の中で、ゆっくりと分解と循環を続けながら、分解されたモノが異なるシステムへと還元されていくあり方は、小さな集落のレジリエンスであると言えるのではないだろうか。

1．人による分解

畑を守る

人口減少している中山間部で農作物を育てるのは大変だ。鹿や猪、猿たちから作物を守らなくてはならないから。そこでは、家で使われていたモノたちが活躍している。不要になった扉は、網で囲った畑に入るのに丁度よい。ガードレールや瓦も、下からの侵入者を防ぐのにうってつけだ。室内で使われていた絨毯や布団は、畑や道に敷かれて雑草を防ぐという新しい役目を担っている。水の確保は風呂桶やドラム缶たちの仕事。そして、畑の鹿威しには空き缶やおもちゃ、ペットボトルの出番。まさに、ブリコラージュな世界だ。

水やエネルギーを自給する

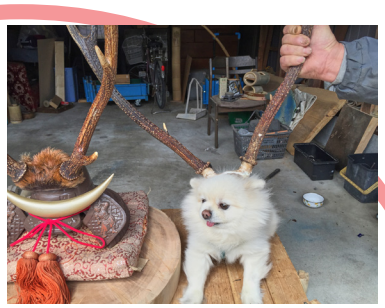
山奥の澄んだ渓流の水を貯めて、長いパイプで集落までひく。工事現場で不要になった網やドラム缶、風呂桶は、落ち葉や枯れ木などを除去するために再利用される。廃材や枯れ枝、間伐材や薪は、家で使う火力となる大事な資源。コンロやストーブは空き缶やドラム缶で作る。自分たちの生活に必要な水も火も道具も、みんな自給してしまう。だから、ちょっとやそっとの自然災害ならば自力で立ち上がれる。

誰かの注意をひく

集落を歩いていると、時々「なんだろう？」というものに出くわす。アート？エンターテイメント？ジョーク？誰がそこに置いたのか、なぜ置いたのかも分からない。ただ人気のない集落で、よく分からないオブジェたちは人が来るのをじっと待っている。見た人はなぜか人気を感じてしまう。それが彼らの狙いなのかもしれない。

みんなで使う

古い集落では斎場や墓が隣り合わせている。先祖のお参りに必要な水場や道具は、みんなで持ち寄って共有する。作物を洗ったり、ゴミをとったりする古い道具たちも、みんなで共有。不要になった家具や建具は欲しい人へと渡していく。使われなくなった水力発電所跡は、子どもたちの遊び場や動物たちの道になる。わざわざシェアと呼ぶ必要もない。みんなで共有することが当たり前だから。



自分で使う

花弁のようにカットされたタイヤは植木鉢。滑車や円形ハンドルは自家製フィットネスマシン。山で見つけた鹿の角は、兜につければ立派な五月人形となる。裏の渓流にかける橋は、丸太をチェーンソーで彫刻してアートっぽく。クリエイティブリユース学のお手本のよう。

2．動物・植物による分解

棲みやすくリフォームする

人が住まなくなった空き家の新しい住人は動物たち。イタチ、ハクビシン、あるいは、たぬきかもしれない。新たな住処が気に入った彼らは、そこで家族をもつ。そして、彼らの排出物を目当てに微生物や昆虫が集まってくる。そうして、新しい主たちの生活スタイルに合わせて、空き家は変えられていく。

シェアハウスのすすめ

都会ではビルの屋上に庭を作ったり、壁やベランダに植生したりと、植物との共生デザインが注目されている。中山間部では、植物たちからすすんで共生を仕掛けてくる。まさに多様な植物とのシェアハウスの実現。

新しい風景をつくる

かつての焼却炉の煙突からでているのは美しいツタ系の植物だ。自前の貯水タンクの上には、植物たちによる小さな庭が作られている。中山間部では、空の一升瓶がよく捨てられているが、植物たちはその中にも小さな世界を築いていく。かつて職人が作った石積み水路の上には、海馬（トド）のような大木が乗り、まるで雄叫びをあげているよう。植物たちが生えて、表と裏の見分けがつかなくなった人工芝。集落は、さながらジル・クレマンの動いている庭のようだ。

3．未来に委ねられた分解

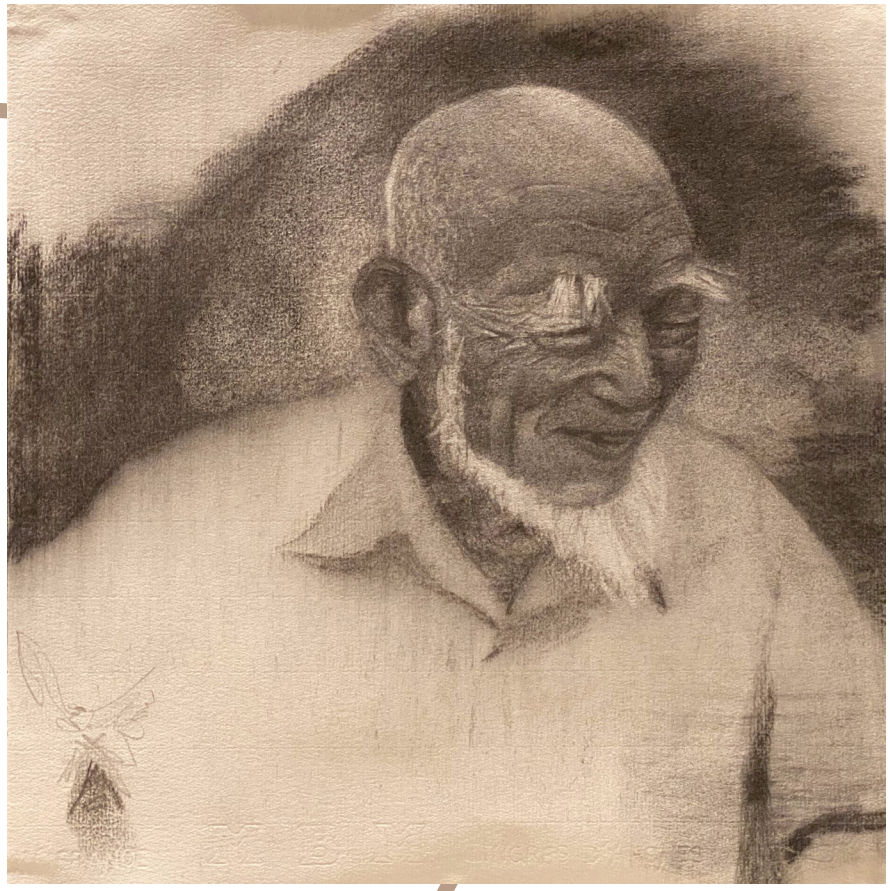
記憶の手がかりを残す

微生物も分解しないモノたちは、徐々に地中へと姿を隠していく。その姿が発見されるのは、おそらく未来の人たちによってだろう。その時、ここにどんな人たちがいて、どんな生活をしていたのか、私たちが古墳を発見した時のように、知らない過去の謎への手がかりとなるのかもしれない。

ある分解者の一日

小林 孝浩

岐阜県本巣市根尾地区で「農機具が壊れたらいつでも、誰からも頼りにされるお爺さん」、所機械の所孝一さんを取材した。かつては物資が不足し道具を修理して使うことは当たり前であったが、現代では「買い替える」という習慣に変容している。分解の一形態である「修理すること」に着目して、現代における意味合いや、地域における役割の読解を試みる。



氏名：所 孝一（ところ こういち）
愛称：こういっつぁ
年齢：84 歳

本巣市根尾越卒（おっそ）地区にて、専業的な大規模農業の傍ら、農業機械の修理を行う。その屋号は「所機械（ところきかい）」。近所だけでなく、30km 離れた山奥の地区からでも修理の依頼が舞い込む。門脇（すぐ隣の地区）で次男として誕生。27 歳で一軒家（今の作業場）を購入、31 歳で結婚。

幼少期 ～ 見習い

もともと機械が大好きで、小学の頃に竹の筒で懐中電灯を作ったりした。6 年生の時は運転手になりたくて、机にハンドルとかを取り付けて、ひどく怒られた。中学の頃にはギターが流行っていて、針金で作ったりもした。中学を出たあとは、マンガン採取や木を割る仕事をしていた。木を割るのは徳山で、冬までの半年間。初めて親から離れて寂しかったし、ありがたさもわかった。周りはみんな岐阜に行ったが、自分は行くとは言わなかった。二十歳から 5 年間は鍛冶屋の見習いとして奉公していた。その親方が使っていた吹子（手動の送風機）は、まだここにある。当時、親方が作った道具は樺太でも使われていた。

そのあとは、岐阜大学近くの農業機械の販売店でセールスマンとして働き出した。農業機械が出現した頃のこと。当時は、まだ機械が珍しくて、使い方を教えたり簡単な不調を直したり。みんなが扱いに慣れていないから、1 年間放置して掛からなくなる。最初は普及のための教育が多かった。教えてもらいながらやった。次男もそこで勤め出してから、自分は辞めた。

今の作業場について

この家は、もともと宿屋で明治 30 年頃の建物、築 120 年くらい。当時、入り口すぐには六畳ほどの厩（うまや）があって、農耕のために馬を飼っていた（牛を使うようになったのは、もう少し後の時代とか）。

入り口すぐの柱には、馬が逃げて行かないように、横棒を通すための四角い穴がある（消火器の上下）。

作業場には手作りの囲炉裏。不要となった羽釜が使用されている。

板が敷いてある場所は「芋穴（いもあな）」。地面に穴を掘った構造で、冬の寒さから芋を守る貯蔵庫。
後日、「根尾村史」で調べると記載があった。寒い地域ならではの知恵が、いまだに実践されている。

ヤカンではお湯を沸かしている。沸かしたお湯で缶コーヒーを温めたり・・。

こちらは、ペール缶で手作りしたストーブ。
煙突の先には、不要になった農機具の部品が使われている（脱穀機の穀物を貯めるためのタンク部分）。

おもちゃも大切な商売道具？

農機具の修理

修理は、小遣い稼ぎ程度。田んぼは 4ha（40,000㎡）で、3 分の 2 は個人に販売、残りは農協に出荷。今年はあまり穫れなかったから、農協に出しすぎて足りないかもしれない。長男は、農業を一緒にやってくれているけど、修理を継ぐつもりはないらしい。

なんでも置いてあるのは、「お客さんが何を必要としているかわからない」から。仕事でそう教わった。

この時期は冬支度で薪を切るから、チェンソーの修理が増える。でも最近の機械は触りにくい。電装部品はわからん。ホームセンターのやつは直しにくい、大量生産のものは作りが違うから。販売店のものは高いが壊れにくく、直しやすい。

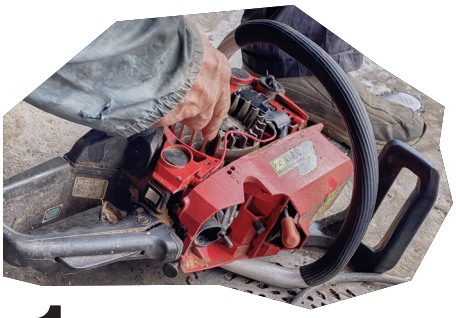
「エンジンの掛かりが悪いな。これを外したいけど、外れんな〜。ぬかれずんば、ぬかしてみせよう・・！」

突然の訪問者

夕方に突然の訪問者。「家の改装をして余ったから、要らないか？」と、斜向かいのおじさん。サブロクの合板を 2 枚と畳 5 枚。おじさんは、元のたばこ屋。30cm くらいの長いタバコをよく買った。

合板は何にでも使えるし、畳は畑に敷いて草の抑えに使う、とのことで引き受ける。なるほど、地域の「分解者」としてよく認知されているわけだ。

修理の続き



1 コイルと磁石の隙間を調整する。

2 スターターを引っ張って、本体ごと持ち上がるくらいでないといけない。こいつは、紐が出てきてしまうから「圧縮が足りない」ということ。以前にも、この部品（イグニッションコイル）を構って（取り替えて）いるから直してやりたい。機械に対する愛着を感じる。

3 軸を抜くためにあらゆる方法を試す。ヤカンで沸かしたお湯をかける。熱で変形して緩むことを狙っているようだ。知恵を与えれば、ヤカンのお湯も立派な道具になる。

5 ようやく引き抜けた。ひとまず掃除。

6 キャブレター周辺を確認。

7 エンジンは掛かるようにはなったが、まだ本調子ではない。

4 引き抜き器（ギヤプーラー）で試す。引っ掛かりがなく、てこずる。

8 気がつけば、あたりはすっかり夕暮れ。

・・・今日はここまで

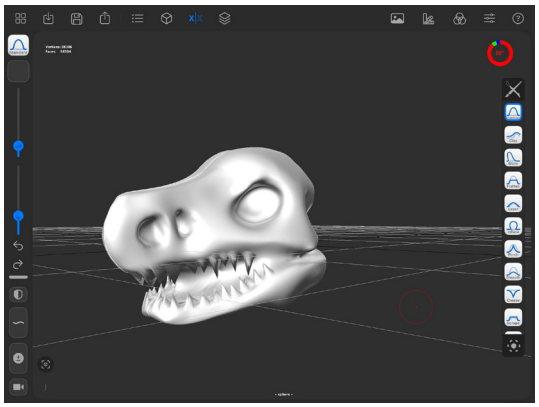
越波博物館

松村 明莉

もしも空き家に残された謎のプラスチックが恐竜の化石だったら？先祖が使っていた箸だったら？最初に感じた「これはなんだろう？」という気持ちをそのままに、想像上の模型を制作しました。

岐阜県の根尾越波地区のとある空き家に、謎の白いプラスチックが大量に落ちていました。私はこの物体を今まで一度も見たことがなく、何かの動物の骨だと思いました。他の人たちにこの物体を知っているか聞いてみたところ、知っている人はひとりもいませんでした。そして、箸、毛糸を編む棒、アクセサリーなど、さまざまにプラスチックのかつての姿について想像を巡らせていました。

私たちが捨てたごみなどの痕跡も、この白いプラスチックと同じ様に、何十年何百年後に誰かが発見して勝手な想像を行うかもしれません。私たちの痕跡もまた、化石のように未来の想像の対象となるのです。その考察は、実体は持たないながらも知識として地層のように堆積していき、新たな人類の歴史のひとつとして刻まれることでしょう。



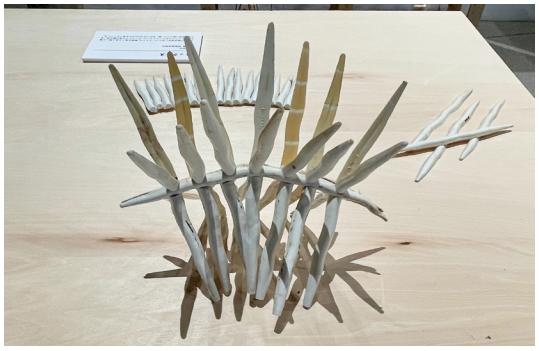
オッパザウルス

三畳紀中期
岐阜県・根尾越波地区
体長 30~150cm
・
小回りの効く脚と鋭い牙で獲物を捕食していた。獣脚類の一種。近年、越波地区の空き家から綺麗な状態の骨が発見されたため、大量絶滅を乗り越えて現在も越波地区に生息しているのではないかとされている。

ネックレス

縄文時代
岐阜県・根尾越波地区

・
かつての越波地区に住んでいた人々は、動物を食べたあと残った骨を加工してアクセサリーにしていた。ネックレスの骨の数が多いほど強い男性の証とされ、長いものでは 3m のものも見つかっている。



ネオゲニア

古生代カンブリア紀
岐阜県・根尾越波地区
体長 10~20cm
・
海底を這って生物の死骸などを食べる。
1920 年に発見され、1952 年に復元図が作成されたものの、1970 年には上下、1997 年には前後が逆であることが判明した。

箸

1950 年 ~1980 年頃
岐阜県・根尾越波地区

・
越波地区の人々が、祝い事の食事の際に使用していた箸。ものが掴みづらく普段使いには向かない。

人造絞り丸太用当て木

1950 年代以降？
岐阜県・根尾越波地区
プラスチック製
・
床柱に使用する人造丸太をつくるため、生育中の杉の幹にこの当て木を針金等で巻き付ける。2~3 年の木の成長を利用して当て木を食い込ませ、木肌に凸凹の絞り模様をつける。

Fermenting memories

メノン カルティカ

The documentary starts with the definition of the word Ferment in English.
There are two definitions put forward,
`chemical process involving micro living organisms and enzymes`.
The second meaning explains ferment as
a `state of unrest or a process of active often disorderly development`.
ドキュメンタリーは、Ferment という英単語の定義から始まる。
まず、微生物や酵素による化学的プロセスという定義。
そして、無秩序な生成での不安定な状態、あるいは活発なプロセスとして発酵という別の定義。

The artist describes the abandoned house as:
A place which seems inactive and active at the same time.
A place where everything is stagnant and chaotic development is happening at the same time.
A place where time has stopped and is flowing simultaneously.
A place where you feel the absence and presence of life parallelly.
作者による廃屋は、
非活動的であり、活動的でもあるような場所。
すべてが停滞し、混沌とした生成が起こるような場所。
時間は止まり、そして同時に流れているような場所。
生命の不在と存在を同時に感じる場所。

In the particular abandoned house that is being explored in this documentary, items are half packed in cardboard boxes as if they were in the process of moving. It feels like the people of the house left to get a tape for packing the boxes and just never returned. However, nature started growing inside, insects, plants , stray animals found a new home and new usage of the items that they found.

ドキュメンタリーで訪ねた空き家では、段ボール箱に半分だけものが詰められていて、引っ越しの最中のようだ。まるで梱包用のテープを取りに行ったっきり戻ってこなかったかのように感じる。しかし、いつの間にか、その家の中で自然が育ち始めている。昆虫や植物、野生動物たちは新しい棲み家を見つけ、家に残されたもの使い、そこで生活を始めている。

The artist compares the abandoned house to the feeling of eating a 100 year old home made pickle, that she ate at her friends house. The time and invisible activities that kept happening inside the pickle jar created the precious taste. The pickle wasn't famous, it was personal, made with love, saved over a long time. Similarly, with an abandoned house, it wasn't lived in by any famous people or was historically important but just that aspect of it would make it very precious over time.

作者は空き家を、昔、友人の家で食べた 100 年前の自家製ピクルスを食べるような感覚に例える。ピクルスは瓶の中で漬けられていた続時間と目に見えない営みで、極上の味わいを生み出していた。そのピクルスは有名なものではなく、愛情をもって作られた個人的なもので、長い時間をかけて保存された大切なものだった。ピクルスと同じようにに、空き家も、著名な人が住んでいたわけでも、歴史的に重要なものであったわけでもないが、ただそれだけで、時間の経過とともにとても貴重なものになっていくのだ。

Even though the actual owners of the house have left and memories are not added in a similar pattern, through various interactions with nature and humans more layers are being added. The process may be chaotic.

家の持ち主が去ってしまい、人によって同じように記憶が重ねられなくても、自然や人間との様々な相互作用によって、もとの記憶の上に多くの層が重ねられていく。そのプロセスは、おそらくカオスなのである。

As one watches this documentary and goes through items in the exhibition, the observer too become a part of an abandoned house experience in some way, another layer. Just like the microorganisms working on the pickle, our subtle actions and influences may be invisible right now, but over a course of time, it will ferment into memories.

このドキュメンタリーを観賞し、展示されたものを巡っているあなたもまた、ある意味、空き家体験の一部であり、あなたはある一つの層になる。ピクルスをつくる微生物のように、私たちの微妙な行動は今は目に見えないかもしれないが、時間とともに記憶へと発酵していくのである。

自前インフラの暮らし

吉田 茂樹

水や電気、燃料などのインフラ資源をサービスとして利用するのが当たり前となって久しいが、かつてはそれらを自前で調達していた時代があった。我々はフィールドワークを通して古い自前インフラの痕跡、現在も自ら設置し管理運用している自前インフラ、そして技術の進化で形を変えながらインフラを維持する人々と出会ってきた。それらからこれからの社会をしなやかに生き抜くヒントを探る。

本巣市根尾水鳥地区では飲用および生活用水のパイプやタンクと田畑用の用水路が敷設されている。給水用のポリエチレンパイプや用水路のＵ字溝は既製のものが使われているが、ドラム缶を本来の用途とは違う貯水タンクに転用したりと、身近なもの加工や利用などいろいろ工夫もされている。これらの設備は台風や土砂崩れ、雪害等で破損して補修した形跡も見られるが、その際も身の回りにある様々な部品や素材を利用するなどして、大切に維持管理されている様子がうかがえる。

根尾水鳥地区の用水路の取水口は、集落より 2Km 程山奥の谷川に簡易ダムを敷設して水をせき止める形で敷設されている。近くにはそれ以前に利用していたと思われる太いポリエチレンパイプや鉄骨の台座の残骸も見られた。用水路の途中は何度か破損しては補修された痕があったが、コンクリートＵ字溝の中にポリエチレンパイプを入れているなど、水を通すという本来の用途が果たせるように、状況に合わせて柔軟な形で補修してきている。

集落の共同の水源の維持管理は集落毎に方法が異なっている。当番制のところもあれば、有志が対応しているところもある。根尾長嶺地区では、普段は有志が見回り等を行い、台風による破損など大規模な補修が必要な場合は、作業ができる人を集めて補修作業等を行っているという。ここの水源は車が入れない山奥にあるため、必要な道具や物資は手で運ぶことになるが、普段の生活の中で育まれた人と人とのつながりを基にして、自前インフラの維持管理も行われている。

根尾能郷地区には大正時代の末に設置された水力発電所の遺構が残っている。集落の近くの山の中には、水を運ぶ水路やそのコンクリート基礎、石垣の一部などがひっそりと佇んでいた。古くからの住民の中にはその存在を知っている人もいるが、多くの人々からは忘れ去られた存在になっている。今では発電所は電力会社が所有する大規模なものになっているが、これらの遺構はかつて発電所もまた自分たちの地域において必要な規模で敷設された身近な存在であったことを伝えている。

大垣市上石津地区には、民間企業が三重県北部の自工場の電力確保のために戦前および戦後に設置した二箇所の発電所跡が存在する。かつては必要に応じて発電機や送水設備などを自前で用意して電気を確保することが行われていたが、その後は電力会社から「電気を買う」時代に変化した。しかし近年は小水力発電機や風力発電機、太陽光発電パネルなど新しい技術や製品の登場により、自前で電気を確保する場合に多様な方法を選択できる時代になってきた。発電所跡はその先駆者がいたことを今に伝える生き証人とも言える。

農村の台所革命と モザイクタイルの流し台

金山 智子

空き家や廃屋に入って、私が必ず探すのがモザイクタイルの流し台。タイル好きとして、特に古いモザイクタイルの流し台や風呂桶、かまどに興味がある。根尾越波の集落でも、レトロなモザイクタイルの流し台たちによく遭遇する。現役として使われているものもあれば、室外の洗い場になっているものもある。廃屋では折れた柱の陰で幸運にも原形を留めているものも多く、これまでに許可をいただいて廃家が潰れる前にモザイクタイルの流し台をレスキューしたこともある。

今でも、銭湯のモザイクタイルの壁画は人々の癒しとなっているし、レトロなマジョリカタイルがついた建物は、カフェ空間として楽しまれている。DIY 素材としてモザイクタイルの人気も再燃し、リノベーションでも好んで使われている。そもそも、山奥の小さな集落になぜモザイクタイルの流し台や風呂桶があるのかは分からず、ずっと気になっていた。そこで、2020 年秋、岐阜県多治見市笠原町にある多治見市モザイクタイルミュージアムにプロジェクトメンバーと見学に行った。

岐阜県は知る人ぞ知る、タイルの一大生産地。1922 年の平和記念東京博覧会でタイル業者が集まり、タイル館を建て PR したことが契機となり、それまで、内張瓦や壁瓦など様々に呼ばれていた名前を「タイル」という呼称で統一することになったそうだ。1923 年に起きた関東大震災によって、木造から耐震不燃建築へと大きく建築が変わる中で、タイル需要も急速に伸びた。美濃焼茶碗の町だった多治見市笠原町は、この流れからモザイクタイルの生産地となり、1950 年代には多治見、土岐、瑞浪だけで 150 以上の工場が存在し、タイル産業は東濃の代表的な地場産業となったという歴史的な背景がある。

そして、一般家庭におけるタイルの普及には、2 つの運動が影響している。まず、近代化における衛生政策。タイルを使用した風呂場や便所がその代表。もう一つが台所革命。戦前から、かまどや流し台にモザイクタイルを貼るのが流行っていたが、これはやがて台所革命となっていく。特に、農家の台所は「かまど」や「座り流し」など、使いにくくて不衛生だと、農村で生活向上運動や台所改善運動が推進されていった。これにより、水道や立ち流し、調理台や収納、窓など、家事の効率が上がる明るい空間へと変わっていく。モザイクタイルの流し台は、この運動と共に山村の集落に持ち込まれたのである。

その後、モザイクタイルの流し台は、今度はピカピカしたステンレスの流し台へ変わっていく。中山間部の集落では、モザイクタイルとステンレスの 2 つの流し台を仲良く並べて使っている家が多い。きっとそれは、モザイクタイルの流し台に愛着があって捨てられないのだと、タイル好きの私は勝手に想像している。

参考文献
和木康光．2011.『炎と土の綾なす装い―美濃焼タイルのあゆみ』一般財団法人たじみ・笠原タイル館
INAX ライブミュージアム企画委員会 2018.『和製マジョリカタイル―憧れの連鎖』LIXIL 出版

生命的长河是无止境的

生命という流れを追って

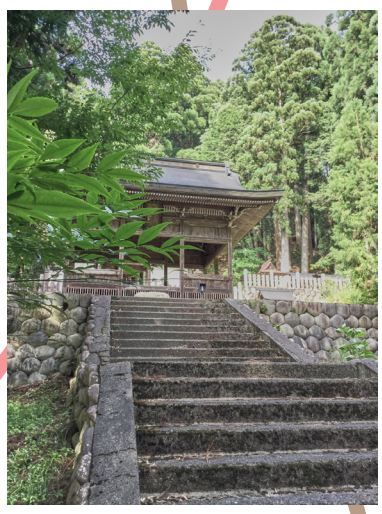
鄧 玉潔

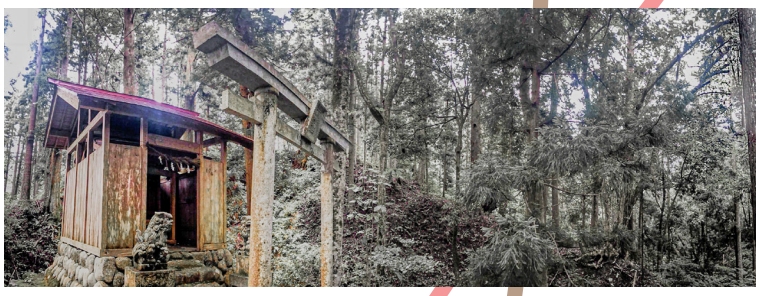
中国には、「生命的长河是无止境的」という話がある。

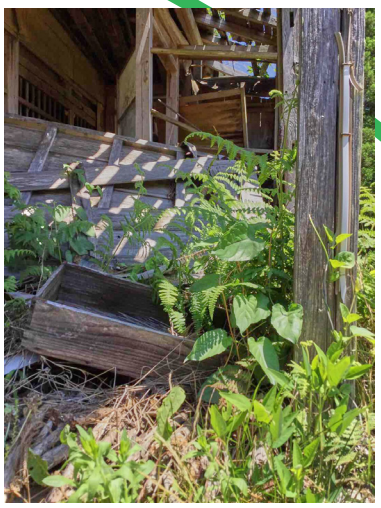
これは、一つの生命が消えて、分解され、別の生命が誕生していくことの繰り返しによって、生命は続いていることを、長い川の流れに例えた話である。
人の死後、そこに残されたものは、死者の考えと存在の証となる。岐阜県の根尾越波集落の空き家や神社は、そこに生きていた人たちの記憶や思いが存在していたことの証であり、今もそこに在り続けている。集落に住んでいた人たちは、みな名古屋や岐阜に越してしまったが、週末になると、畑の世話するために集落に戻ってくる。年を取ると、病院や買い物などの不便な場所での生活は厳しい。それでも山奥の集落に戻るのは、住んでいた人たちが集落を守りたいという思いをもっているからではないだろうか。

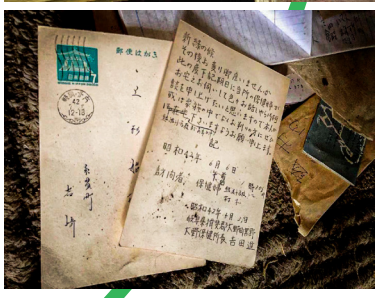
神社・思い

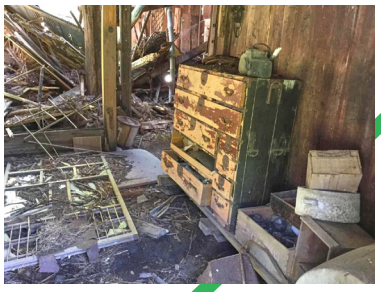
根尾越波集落には、住む人はいなくなったが、今でも集落の神社は、きれいに掃除されている。

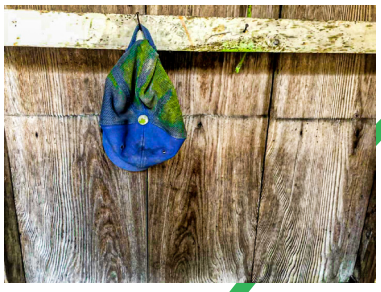












空き家・生命の力

家主の痕跡だけが残された根尾越波の空き家は、今、植物や動物たちの命によってつながれている。動物たちは植物に栄養を与え、植物は空き家に生命の力を与え、そして、空き家は動物たちに棲み家を与えている。このようにして、生命は続いていく。

植物・墓・人生

集落で見かける墓。その墓碑の墓誌ははっきりと読むことはできないが、短い言葉で墓の主人の一生を語っている。

集落に残された植物、古い新聞、捨てられたおもちゃは、あたかも墓誌のように、この集落の一生を語っている。

東新聞　2011年(平成23年)6月20日　月曜日

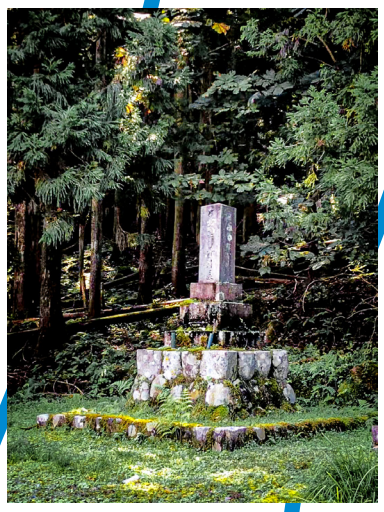
トンネルの向こう

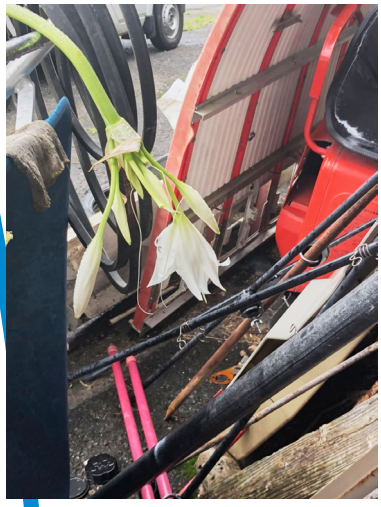
世界からの地域再生

最終章　山村再生・根尾・越波編④

集落、兄弟がつなぐ

住民は２人だけ、区長を継承





活動リスト2020

Composition,
Decomposition,
Recomposition
根尾の分解者たち

2020.05.13	根尾高尾、能郷集落	伊藤翔太氏の山守ビジネス見学、 能郷集落の羽田すみ子さんの炭小屋での芋煮の見学（オンライン）
2020.06.08	根尾能郷集落、上大須ダム	能郷集落の水源調査、羽田すみ子さん宅にて辣韮漬け見学、上大須ダム見学
2020.06.15	根尾越卒集落	越卒集落の斎場調査、所孝一さん（所機械）インタビュー、 所さんの田植え作業手伝い
2020.06.22	根尾畑、長嶺集落	プロジェクトの畑草刈り、長嶺集落の陶芸家金子典栄さん訪問インタビュー
2020.06.29	根尾畑 , 根尾春日神社、根尾川河原	畑作業、神社＆河原フィールドワーク
2020.07.13	根尾畑、門脇集落、大井集落、 八谷集落、越卒集落	フィールドワーク（神社、水源ほか）、所孝一さんンタビュー
2020.07.18	岐阜県立博物館	博物館内と所蔵庫の見学と博物館スタッフとの意見交換
2020.07.22	根尾公民館	根尾盆踊り練習、３D データ作成の撮影、インタビュー
2020.07.28	根尾畑	手入れ
2020.08.28	根尾長嶺集落	陶芸家金子典栄さん訪問
2020.09.04	根尾畑	畑での廃品利用データ収集
2020.09.09	根尾畑	草刈り
2020.09.26	根尾越波集落、上大須集落	廃屋調査、松葉五郎さんたち墓の養生インタビュー、 アーティスト林隆一さん宅訪問インタビュー
2020.10.11	根尾黒津・越波集落	廃家調査、元小学校跡周辺フィールドワーク、河原廃棄物調査
2020.10.23	多治見市モザイクタイルミュージアム	ミュージアム見学、タイル産業学習、ワークショップ参加
2020.10.29	上石津時山第一発電所＆第二発電所跡 （大垣市上石津）	旧発電所跡フィールドワーク
2020.11.01	旧長嶺小学校、越波集落	廃校撤去作業調査、廃屋調査、フィールドワーク
2020.11.06	金生山明星輪寺、石灰採掘現場（赤坂）	明星輪寺訪問、周辺フィールドワーク、採掘現場の見学
2020.11.14	根尾能郷集落	能郷水力発電所跡調査、移設された祠および周辺フィールドワーク、 根尾断層館見学
2020.11.20	春日森の文化博物館（揖斐川町） 池田町フィールドワーク	『聞き写し　春日』写真展見学、池田町茶畑見学
2020.11.27	根尾黒津・越波集落	河原廃棄物調査、廃屋調査
2020.11.27	根尾越卒集落	所孝一さん取材
2020.12.04	根尾越波集落 (五郎さん宅)	松葉五郎さんインタビュー
2020.12.11	美濃まほろば（本巣市）	松葉五郎さんインタビュー
2021.02.08	根尾、上大須集落、上大須ダム	ダム見学、雪に埋まった集落のフィールドワーク

SPECIALTHANKS!

松葉五郎
松葉恵美子
所孝一＋ご家族の皆さん
葉名尻義一
葉名尻紀子
羽田すみ子
伊藤翔太
上杉勝司
松葉唯治
林隆一
金子典栄
高橋保直
松葉修治
灰田有
亀田茂
・
岐阜県立博物館
春日森の文化博物館
多治見市モザイクタイルミュージアム
お食事・喫茶たなか

レオ＆チコ

Composition,
Decomposition,
Recomposition
根尾の分解者たち

プロジェクトメンバー	金山 智子・小林 孝浩・吉田 茂樹
	松村 明莉・メノン カルティカ・鄧 玉潔
発行者	Community Resilience Research 2020 (IAMAS Project)
発行日	2021.05.11
デザイン	山口 伊生人